三日月の傷

咲良 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三日月の傷

【Nコード】

N6789M

【作者名】

咲良 紫苑

【あらすじ】

猫と青年と私のはなし。

出会い

まだ夏本番でもないっていうのに少し走るとじわりと汗がにじみ出て不快指数がはね上がる。

それでも私には走り続けなければならない理由がある。

その訳はいたってありがち。

今日は前期試験の最終日だというのに、朝起きると間に合うか間に合わないかの瀬戸際だったからだ。

私の家から駅までの間には古くからこの土地を守り続けている神社がある。

神社の周りはちょっとした森のようになっていて、なかなか通り抜けしようなどとは思えない雰囲気である。

本当だったら駅までは直線距離でももの3分で行くことができるはずだが、この森があるせいで15分もかけて駅まで行くことはめになる。

よし。ここを通ろう。

いつもならこんな道なき道を通ろうなんて思わないのに、今日はなぜか神社に思いが引き寄せられる。

遅刻を気にしてというよりは興味本位でこの道を選んだという感覚の方が強いが、神社を通って行けば好奇心を満たすこともできるしテストに間に合うかもしれない。

一石二鳥だ。

神社の敷地内に入ると辺りの喧騒が全く聞こえなくなる。気温もアスファルトに囲まれた外の世界とはだいぶ違い、低くさつきまで火

照っていた肌も少しずつ冷やされていく。風が吹くと肌の熱を奪って心地良い。

傾斜の緩い上り坂を登り終わると、神社の境内が見えてくる。それほど立派ではないが手入れの良くされた小綺麗な境内だ。

誰かが投げたお賽銭が賽銭箱の横に落ちていた。

勝手に通らせてもらっては悪いと私は手を合わせることにした。

通らせてください。もしよろしかったらテストに間に合い、合格点がとれますように。

若干図々しいかなとは思ったけれど、そう祈ってみた。

一通り祈り終わると、右足の隣に置いたバッグを取ろうとしゃがむ。

私の足元には一匹の綺麗な猫がいた。大きな瞳でこちらの様子を見ががっている。

ブルーがかかった灰色の毛をした美しい猫だ。毛の長さは短いながらも滑らかな毛並みをしている。

猫相手に言うのも変だけど、とても美人。

「おいで」

そう言うと、猫はツンとそっぽを向いてしまった。

やっぱり猫は気位の高い動物らしい。

そんなところがかわいいのだけれど。

猫を触るのを諦め荷物を掴むと駅へ向かうために猫に背を向け歩き出す。

にゃーと私を呼びとめる声が聞こえた。
振り返ると、さっきの猫が私の足にすり寄ってきた。

わーかわいい。
ちよつと懐いた。

私は猫の頭をそつとなでる。

猫は猫パンチを繰り返して来る。

私はそれを華麗によけて、突っつき攻撃をしかける。

猫も負けずに猫パンチ

私も負けずに突っつき攻撃

何度目かの私の突っつき攻撃の番になった時、猫はヒラリとそれかわす。

私の人差し指は空を切る。

あ、飽きられたかあ

残念

「…俺以外の人間に触らせているところ、始めて見た。」

振り返ると、そこには薄浅葱色の着流しを着た一人の美青年が立っていた。

青年だとわかったのは「俺」と言ったからで、もし何も言わずに現

れたのなら、女性だと間違えそうな程、美しい人だ。

その美しすぎる青年に、猫は最高に可愛らしいそぶりで甘える。

その行為に答えるように、青年は猫を抱きあげる。

猫は安心しきったように身を預ける。

学校に遅刻しそうだったことも忘れ、私はまるで恋人同士のような
2人をボーっと眺めていた。

秘め事

目の前の美青年と猫は私を一瞥すると、そのままクルリと向きを変え立ち去ろうとする。

「ちょ、ちょっと待ってください」

私は特に用があるわけではなかったが、反射的に呼び止めていた。そのことに自分でも驚いた。

青年は、面倒くさそうに何？と振り向く。

そして何も言わずに口をパクパクさせている私に「お前何？うざい。さっさと消えろ」と不機嫌そうに言うとそのまま神社の敷地の奥へと消えて行った。

「な、なんなんだ。私、なんか悪いことしたっけ」

良く分からないけれど、イライラする人だ。

私は彼が消えていった方をあっけにとられたように見つめる。イライラするけれど、すごく綺麗な人だったな。

「どうかなさいましたか？」

私に話しかけてきたのはこの神主さんの息子だ。後を継ぐために勉強しているらしい。

すごく感じの良い人で、近所の評判も良い。

「あ、駅まで近道させていたただきたくて…」

「そうですね。なら、この道をまっすぐ、大きなクスノキにぶつかったら右に曲がるのもう駅ですよ」

「ありがとうございます。助かります」

私は頭を下げ、教えてもらった道のりを歩き出したところで、さっきの青年を思い出した。

神社の敷地の奥へと進んでいったということは、この神社の関係者だよな…

「あ、あの。この神社に着流しの似合う男の人がいると思うのですが…どなたなんでしょうか」

今まで穏やかに話を聞いていた神主の息子は一瞬嫌悪の表情を浮かべた。

その表情は一瞬にして消え去ったけれど、私はしっかりと確認できた。

「さあ。私はそのような人物は知りません。きっと参拝客の一人でしょう」

「え、でも、神社の奥に歩いて行ったんです」
私は食い下がった。なぜか、彼はこの神社に関係している人だと確信が持てたのだ。

「お急ぎなのではないですか？近道をしにここへ立ち寄ったのでしょ

神主の息子はこれ以上の詮索は勘弁とばかりにイライラした口調で言った。

この人は絶対何かを隠している。

これ以上聞いても何も答えてはくれないだろう。

私は仕方なく、もう一度お礼を言つとクスノキを目指し歩きだした。

違和

久しぶりに鈴を外に出してやった。

こここのところ、ずっと家に引きこもりだった俺につきっきりで、退屈そうにしていた。

たまには猫孝行でもすべきだと、気まぐれい思ったからだ。

俺には孝行できる存在は鈴しかない。

鈴は俺から離れることが嫌なのか、しばらく頑として動かなかった。

わかったよ。俺も一緒に外へ出るから。

鈴を抱き、久しぶりに外へ出ると、クスノキが青々とした葉を誇示している。

暖かい風が着流しの裾や襟元から入り、からだに沿って流れていく。確か、前回外へ出た時は色のない枝に厭らしいほどに眩しい雪が乗っていた。

鈴は、俺がすぐに家に入らないことをちらりと確認し、安心したのか俺の腕から飛び出す。

だいぶ猫らしく振舞い始めた。

ずっと一緒にいると、こいつが猫だということを忘れてしまう。

いや、俺が人間だということを忘れているのかもしれないし、鈴が自分のことを人間だと思っているのかもしれない。

どちらにしても俺と鈴は同じ世界に生きているということだ。

それでいい。

それがいいんだ。

鈴は蝶を追いかけて境内の方へと走っていく。視界の片隅に常に鈴を入れながらも、久しぶりの外の空気と自分の吐きだす空気を同じ濃度にしようかと心を落ち着かせる。外に出ることは俺には億劫なことこの上ない。人の気配が漂う世界に幼い頃から拒絶反応を示す。

さつきは心地よく感じたあの風も、今ではもう不快にしか思えない。目を瞑ると額から汗がにじみ出る感覚が鮮明に感じ取れる。毛穴から水分が出てくるその一瞬も感じ、余計に気分が悪くなる。

「…鈴」

辛くなると鈴を呼ぶ。

鈴はどんなに遠くにいても、俺が呼べばその滑らかな毛並みを俺の手に摺り寄せてくる。

それだけで俺は気分が随分良くなる。

早く、俺のところへ来てくれ。

「鈴…？」

もう一度鈴の名前を呼ぶが、来る様子がない。目を開けるだけでも苦痛を伴ったが、鈴に何かあったのではと不安になり、ヨロヨロと立ち上がる。

「鈴、どこにいるんだ？」

境内の前まで歩いてやっと見つけた。

鈴は変な女と遊んでいる。

あいつが俺以外の人間といるところなんて始めて見た。

「鈴」

多分、俺はそう言った。

心臓はとち狂ったように鼓動を刻み、全身の血液が逆流しているような錯覚に陥る。

ますます気分が悪くなってくる。

もう、意識に何もかもがひっかからない。

早く、鈴に触れたい。

鈴は変な女の攻撃をかいくぐり、俺のもとへ駆け寄ってきた。

その様子が必死で、まだ俺は捨てられたわけじゃないと少し安心した。

俺以外の人間に触らせているとこ初めて見た。

鈴に向かってそう言ったはずが、変な女は勘違いしたらしい。

振り返って俺たちを見る。

久しぶりにこんな近くで人間を感じ、不快感は募る。

うざい。こっち見んな。

鈴の毛並み、甘えた声に集中し、この場を離れることに専念する。

「ちよ、ちよっと待ってください」

変な女が呼び止める声がする。

うざい。

うざい。

何？と言って振り返ると変な女は金魚のゆい口をパクパクさせていた。

「お前、何？うざい。消えろ。」

それだけ振り絞り、変な女から離れていくと、少しずつ意識がはつきりとしてくる。

鈴が申し訳なさそうな目で俺を見て鳴く。

無事にここにいてくれればいいんだ。

鈴の頭をなでてやる。

そして気がついた。

なんで俺はあの女に呼び止められて振り返ったりしたんだ。

なんで俺はあの女に向けて言葉を発したんだ。

もう一度鈴は鳴き、俺の胸に頬を摺り寄せた。

傷

そういえば、クスノキってどんな木だったけ。

クスノキを指せと言われてそのまま歩いてきてしまったけれど周りにある木はどれも全て同じに見える。

この木かな。

そう思って葉を見ると、扇が二つに割れたような形をしていた。

これはさすがにわかる。

イチヨウだね。

さっきまでは息も切れ切れ学校を目指していたわけだが、もうとっくに間に合わない時間になってしまった。

今日のテスト、必修だったのに…

まあ。いいか。こんなこともあるよね。死ぬわけじゃない。

諦めが早いのが私の取り柄。

周りから、絶対そこは諦めたらダメでしょう、という声が聞こえてきそうだけど、今の私にはテストよりもクスノキの方がよっぽど気になる。

私は成り行きに任せてクスノキを探してみることにした。

それに、第一、クスノキが見つからなかったら駅にはたどり着けないし。

ひんやりとした風が頬をなでていく。

なんだろう。すごく懐かしい気持ちになってきた。

神社には小さい頃は夏祭りや学校帰りに良く遊びに言ったりしたけれど、大学生になってからは一度も着たことがなかった。今日この神社を突っ切ろうと思ったのも不思議なくらいだ。

お母さんに聞いた話だと、この神社の神主さんはすごくいい男らしい。

お母さんのストライクゾーンは広いから、どの程度信用性のある情報かはわからないけれど…

まあ、確かに神主の息子を見る限りでは並み以上なんじゃないかと思う。

本当は小さい頃一度会ったことがあるはずなんだけど、私の記憶には残っていない。

なんでも私が神社で遊んでいる時に階段から落ちたんだそう。

その時私を送り届けてくれたのが神主さんだった。

いまでもその時の傷が左手の親指の付け根に残っている。

どんな落ち方をしたのかわからないけれど、この傷以外は目立った怪我はなかった。

でもその時の記憶はすっかり抜け落ちてしまっている。

病院では、落ちた時のショックで記憶がなくなることはよくあることらしい。

精密検査をした結果も正常だったからすぐに家に帰ることができた。

この傷を見るたびに何か大切なことを思い出そうと記憶を探る私がいる。

早く思いだせたらいいのに。

その何かは嫌なことではなくて、とても心地の良いことだって本能

でわかっている。

だから思いだせなくてイライラすることはあっても、不思議と傷を見て不快に思うことはなかった。

クスノキ

傷を見ていた目線をあげると、目の前には大きな木に守られるように一件の木造の家が建っていた。

離れようだ。

質素でこじんまりとしており歴史を感じさせる。

そのまま時代劇にできそうな佇まいをしている。

その離れを覆うように木は枝葉を悠々と伸ばしている。

離れと木の周りだけ時間の流れが止まっているようで、その異質さは私の興味をかきたてた。

さわさわと葉が奏でる音をひとつひとつ聞き取るうと少し必死になつてみる。

感動する映画を見てもいくら素晴らしい歌を聴いても自然が発するメッセージに勝てるものなんてないと思う。自然は一瞬にして人の心を捕らえて話さなくなる。

このまま耳をすませ続けたら木の根が水を吸い上げる音まで聞こえてきそうだ。私は目を閉じ、左手でそつと幹に触れた。

冷たく少し湿った幹の感触に少し違和があるものの、私の掌を自身と同化させるように徐々に木の温度は上昇していく。そして完全に一体となった時、私は一人の男の子と猫と女の子の姿を眺めていた

。2人と1匹は小さな三角形のような円を作り、何やら話をしていくようだ。猫がひと鳴きし、女の子の左手を噛んだ。

「痛っ」

私は我に返り、幹から手を離すが、特に変わったことはなかった。あるのはあの、三日月型の傷だけだ。

「おまえ、いい加減にしろ」

いきなり人間の声が入ってきた。

驚いて振り返るとさっきまでは閉まっていたはずの離れの戸が全開にされ、そこには先ほどの青年が開け放たれた戸に寄り掛かるようにして立っていた。

中はただっ広い和室で、生活感を感じさせるようなものは部屋の中央に敷かれた布団と小さな文机くらいだった。

その青年は先ほど見た時よりもさらに美しく、具合が悪そうに青白かった。

「お前、なんのようどこにきた。さっさと消えろと言っただろ。俺を殺す気か」

青年は一息でそう言うのと更に具合が悪くなったようで、戸によりかかるようにして座りこんだ。襟元は乱れ、白い肌が覗いている。でも、額を抑える手は思っていたよりも筋張っていて、男の人の腕だった。私は不謹慎だが、胸がドキリと跳ねたのを感じた。

しかし、彼の物言いはあまりにひどい。

いくら具合が悪いと言えど、言っていることと悪いことがあることくらいわかっていても良い年齢ではないか。

「人のこと殺人狂みたいない方がいいです。私だって好きでここに来たわけじゃないんです。駅に抜ける道があるって聞いたから探しに来たんです。あなたこそ、神社の人間じゃないくせに偉そうなこと言わないでください」

私はそれだけ言うと、離れを背に歩きだす。

本当にいちいち頭にくる。やなやつ！

やなやつ！！

やなやつ！！

私はズカズカと大股でその場を去る。こんなやつ、一瞬でもかっこいいなんて思った私がバカだった。

初めて会った人に消えるなんて普通言わないでしょう。

ふと気がつくと、そこは見覚えのない景色が広がっていた。

…しまった

怒りにまかせて歩いてきたせいでここがどこだかわからない。

わかるのは…離れまでの道のりだけだ。

私は離れの前まで戻ってきた。

このまま、迷子になり続けるか、恥をしのんで道を聞きに戻るか。私は一瞬の恥を選んだのだ。

さっきと同じ体制で戸に寄り掛かる青年の姿を見つけ、私は意を決して歩を進める。

「私にここからいなくなつてほしかったら、駅までの道を教えなさいよ」

くそう。恥ずかしい。こんな言い方じゃあ負け惜しみみたいで更に格好が悪い。

さぞかし厭味を言われるだろうと覚悟していたが何も言つてこない。

「ちょっと、聞いていますか。駅までの道のりを教えてくれたらすぐに立ち去りますよ」

少し優しく聞いてみても全く反応がない。

無視、されているとか…

寝ているとか…

確認しようとして近くに寄ると青年の額はじつとりと冷や汗で濡れており、顔にはもはや色がなくなっていた。

「え、ちょっと、ねえ、ちょっと大丈夫!？」

まさか死んでいるのではと思い、必死に頬を叩いてみる。かなり冷たくなっていた。しかし、まだ息はあるようだ。

叩かれたことで、青年は小さくうつと声をもらした。

「猫…鈴はどこ?」

私をはじめられるようにして立ち上がり鈴を探しはじめた。

鈴ならなんとかしてくれらると思った。

そもそも、青年と鈴が一緒にいないことが不思議で仕方なかった。だが、鈴の名前を呼んでもどこにもいない。

どうしよう。このままこの人死んだらどうしよう。

私はぐったりとしている青年の元へ戻り、上半身を抱え、畳み寝させる。

布団まで連れていけるほど華奢ではなかったから、その場に寝かせ持っていたハンカチで彼の額の汗をぬぐうと再び境内の方へ走った。

フラッシュバック

目を開けると、すでに日は傾きオレンジの夕焼けの光とその光が生み出す漆黒の影のコントラストが目飛び込んでくる。

そのまま起き上がるうと体に力を入れるが、途端に襲ってくる頭の痛み小さく唸る。

さっきまで部屋の真ん中に敷いてあった布団が窓際まで引きずられて、その上に俺は寝かされていた。

いつもより大量の光が目射す。俺は右腕で目を隠し光をさえぎり記憶をさぐる。

体は激しい運動のあとのようにだるさを抱え、うっすらと汗をかいていた。

ジージーとセミの鳴く声に合わせるようにトクントクンと心臓が波打つを感じる。

どうやら俺の心臓は淡々と鼓動を刻むという役割を思い出したらしい。

朝、あの変な女に出会ったことで俺の何かが狂いだした。いや、狂っていたなにかが戻り始めたのか。

自分でもわからないがあんな女は俺と鈴の世界に簡単に入りこんできた。

なにかが、あの女にはある。

鈴が俺以外の人間に触らせることなんてありえないのだから。

俺が、人として接することができたのだから。

体の調子はいまだに悪いが頭は妙にすっきりしてきた。

「あ、目が覚めましたか」

声がる方向に首を傾けると、そこにはあの女がビニール袋をぶら下げて立っていた。

「ああ」

俺は無感情を装って言うと、もう一度体を起そうとした。

女はその様子を見て縁側をよじ登ると俺の横に腰を下ろす。

相変わらず、自分以外の人間を感じると気分が悪くなるがそれもいささか慣れた。

やっとのことで体を起こし女の方に顔を向ける。

どんなブスかと思いきや、見れない顔でもなかった。

「…もう、私に消えろとか言わないんですか」

女は、若干目を細めて厭味っぽく言う。

「…いくら消えろと言ったところでお前は消えてくれないだろ」

女は眉毛を若干上げ何かを言いかけたが、俺の布団から出てきた鈴の鳴き声でさえぎられた。

「あ、鈴。よかったね。お前の主人の意識が戻ったよ。お前は本当に賢い猫だね」

女は鈴の喉元を優しくなでてやると、鈴は気持ちよさそうに「ゴロゴロ」口とのどを鳴らした。

「おまえ、なんで鈴の名前知ってるんだ？」

鈴が自分の名前を話すわけではない。俺がこの女に教えた覚えもない。

「それが：私にもわからないのです。あなたが倒れて、真っ白になった時にはもうすでに鈴の名前を呼んでいたんです。きっと、私のイメージで勝手に名前を付けていたんだと思ったけど、実際鈴が反応してくれたから、こんな偶然もあるもんなだと思っていました。」

鈴は相変わらず、女の手に体を預けて太陽を仰ぐように眼を細めている。

女は右手で鈴をあやしなから、左手で持っていたビニール袋をあさり、中からミネラルウォーターを取り出し差し出した。

「はい。これ。この暑さです。水分を取らないとまた倒れますよ。」

差し出されたペットボトルはついさっきまで良く冷やされていたのだろう。うっすらと表面に汗をかいていた。

そして俺は喉が焼けつくような激しい渴きを感じた。

喉の奥上と下で密着し、へばりつくような感覚。

人間、餓えはしのげても、喉の渴きにはあらがえない。

究極な渴きを感じた時、目の前にあるのは毒入りだとわかっていても水を飲んでしまうという。

この女から物をもらいうけることは少々不満があるが、ペットボトルを受け取るために手を伸ばす。

その時、女の親指の付け根にある三日月型の傷が目飛び込んできた。その瞬間、脳裏を閃光が駆け抜ける。

それと同時に幼いころの記憶がまざまざとよみがえってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6789m/>

三日月の傷

2010年10月15日08時09分発行